



## 「笹川杯作文コンクール 2011」～中国語で応募～ 第 1 回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

### 風を追うアサザ

四川省 張学梁

去年の 8 月、妻と娘と日本旅行をした。宿泊先は富士山の麓にある温泉旅館である。黄昏時、風雨が吹き荒れた。窓には青い山、そして滝のように流れる碧い雨水。中庭の池でアサザが風に揺れるさまを見て、私は思わず現存する日本最古の漢詩集『懐風藻』に思いを馳せた。

華美ながらも日に日に氷のように冷たくなっていく今の世界では、人々は時代に巻き込まれて急速に前進させられるばかりで、心穏やかにしてこうした景色を味わう時間など殆どない。この夕靄たちこめる異国の地でひとときの休暇を過ごし、旅で疲れきった足を止め、青い水草が風にそよぐのを見るのは、まさに人生の楽園の趣である。

間もなく雨は上がって、深山の空が青さを取り戻し、柔らかく清らかな風が水に浮くアサザを優しく気ままたに撫でている。時折り大粒の雨の滴が落ちると、雨に打たれた葉が浮き沈みして幻想的に姿を変える。突然降りだす山雨に出会うと、アサザは互いに絡まり合って、しみじみと情けを交わしているようである。風雨の中で翻りながら、ひと時の生命のハーモニーを映し出している。澄んだ池に浮かぶアサザは言葉を語らないが、雨露を喜ぶ心や旅する風に焦がれる心は隠しきれない。

「藻、水草の文あるは、故に以て文を諭ふ。」（藻、水草には文とつくものがあるので、文のたとえとする）このように陸機は『文賦』を書き始めている。事実、アサザは昔から中国の文人に美しく描かれてきた。秦観が特に好んだ緑深い山里にあるものも、叙志摩の詩の夕日に映える（ロンドンの）テム川に浮かぶものも、遠野の静寂やカエルの清池への躍動とともに細やかに詠まれてきた。わずか数文字で静と動が完璧に結びつき、情の余韻が残る静寂な幽玄の世界がある。これ程大自然の艶やかな美しさに人の心を惹きつけるものはない。

「林花は雨を著して燕支を湿し、水荇は風を牽きて翠帯長し」の詩情とは、早春ののどかな東風のように、青い山へ大海原の向こうへと遠く旅をする。漢や唐の深遠で濃厚な文化が日本に入ってくると、アサザも同様に日本人から深く親しまれるものとなった。歴史が如何に演繹されようとも、また、国境があるとは言え、人間性の深い所にある文化は雄壮で美しいものであり、どうして分割することができようか。

奈良時代、日本の元明天皇の志は四方にあり、積極的に開放を図って、多くの学者を唐に派遣した。彼らは政治、経済、法令など国を統治するための策を中国に謙虚に学ぶと同時に、大量の漢文学創作の経験と漢詩文の形式を持ち帰った。宮廷では詩の宴が始まり、君臣が飽くことなく歌の詠み合いに興じた。こうした雰囲気のもとで色彩豊かで絢爛な文学、漢詩集『懐風藻』が生まれた。

詩集の名称、『懐風藻』とは、昔の賢者の遺風を追想するという意味である。この文集は、日本の漢詩文の発展においては初期段階にあり、物を賛美した歌あり、官僚の志あり、僧侶の述懐ありといったものである。詩集の思想には中国の儒教、道教が明らかに浸透していて、日本文学と中国文学との交流の始まりを示

す明確な証となっている。日本の漢文学に言及する場合、上古の日本文学に輝く彩りを添えた『懐風藻』を避けては通れない。

文藻は我が難しとするところ  
 荘老は我が好むところ  
 行年すでに半ばを過ぐ  
 今更になんのためにか労せん

この詩は越智広江の『述懐』である。素朴で恬淡とした言葉遣いは、あたかも埃の中にある素顔のようである。一見淑やか表情だが、実は人生の大義に対する問いも含んでいるのだ。素朴な感情が長い時空を透過して魂を導き、ある種の通常とは異なる生命の高みを作り出しているのだ。ため息が出てならないのは、世間の埃にまみれて人々がこの問いを発する時には、得てして既に二進も三進もいかない立場に陥っているからである。人生の奥義は深遠で推し測れるものではなく、これに関して明確な解釈を出せる者などいるのだろうか。

中日の文化の脈絡もこれに似ていて、複雑に織りなされている。アサザや藻類のように、同様に溪水を愛し清風を追うのである。『懐風藻』を手にとると、思わず崇高で格調高いあれらの歳月を思い出す。人の世は、どんなに強大な国家であろうと、どんなに勇猛な民族であろうと、長い歴史の流れの中で、ただ違った形で存在する水草に過ぎないのだ。

一面の青空の下で、水草は清流とともに古き調べが漂う景色を成しているべきものなのである。柔軟な生命が自然と交わる時、互いに依存し調和して共生するということを、昔の賢人達はとうに体得していたのだ。あまたの詩文の中でも、才女、薛涛の『菱苕沼』に出てくる「水苕は斜めに緑藻の浮かぶを牽く」という句には特に心を惹かれる。いつ詠唱しても春風で心が満たされ、柔らかく心を撫でられるような気持ちになる。

歴史を振り返り、過去を見て今後のことを知る。治国国交であるか民間往来に関わらず、棋士であるか商人であるか、はたまた物書きであるか絵描きであるかを問わず…真の名作は、精神の視野が広い人から生み出されるものである。「芳題を撫して遙かに憶ひ、涙の泫然たるを覚へず。縹藻を攀ぢて遐く尋ね、風聲の空しく墜ることを惜しむ」（良い題のもと遙かに思いをはせると、無意識に涙がはらはらと落ちる。生い茂る藻に寄り添い遠くを探すが、風の音がむなしく感じられるばかり）昔の賢人達が広々としている山水を詠んだこの美しい言葉達を、一衣帯水の子孫達は読解できるだろうか。

※アサザ（別名：ハナジュンサイ）ミツガシワ科の水生多年草